

EP8000 SERIES

高信頼・高性能を誇るエンタープライズサーバ「EP8000」とディスクアレイサブシステム「SANRISE」,「SAP® R/3®」で新財務会計システム「hi-Fronts」を構築。
リアルタイムな会計処理と業務の大幅な効率化を実現



日立製作所
業務革新推進本部 部長代理
岩本 元二郎 氏



日立製作所
情報システム事業部
経営システム部 技師
橋本 正文 氏

新財務会計システム「hi-Fronts」

グローバルに活動する企業では、今後は連結決算が中心となるため、関連会社を含めた会計情報を迅速に集約することが不可欠である。また、決算日程の短縮も大きな課題となる。さらに、市場での厳しい競争を勝ち抜いていくためには、業務効率と経営のスピードをさらに向上させることも重要だ。日立では、こうした次世代のビジネス要件を満たす新財務会計システム「hi-Fronts」の構築に高信頼・高性能を特色とするAIX搭載のエンタープライズサーバ「EP8000」とディスクアレイサブシステム「SANRISEシリーズ」、SAP®社の「R/3®」を採用。戦略的なビジネスを支える高信頼・大規模システム基盤を実現している。

厳しい競争時代を勝ち抜く 新しいビジネス環境への対応

日立では、2001年9月に新財務会計システム「hi-Fronts (Hitachi Financial realtime operation network systems)」の稼働を開始した。当初は63事業部(所)と関連会社7社を対象とするが、将来的にはさらに多くの関連会社がこれに加わる予定である。hi-Frontsは日立グループ全社を一つに結び、大規模な財務会計基盤となるわけだ。

システムを構築した背景について、日立製作所 業務革新推進本部 部長代理 岩本元二郎氏は「当社は家電、情報機器、電力・電機、産業機器、設備、半導体など、さまざまな分野の事業を展開しています。事業によって顧客も生産形態も異なるため、従来から事業部制を採用し、独立した企業と同様に運営。財務会計システムも関連各社(以下、各社)・各事業部(所)で個別に運用してきました」と説明する。

しかしグループ経営の効率化が求められる中、こうした従来の枠組みでは対応しきれない面も生じてきた。日立では新しいビジネス環境への対応を果たすべく、システムと業務の見直しに着手。そこで大きな問題が明らかになってきた。岩本氏は「旧システムの稼働期間は数十年にも及ぶますが、その間

には職制や制度の改变、決算方式の変更などさまざまな修正が行われています。これに対応してきた結果、システムがつきはぎだらけになっていたのです」と語る。

当時利用されていたプログラムの本数は、財務会計システムだけでも約6000本。これを確実にメンテナンスするのは至難の業だ。しかも各社・各事業部(所)で分散処理を行っていたため、運用に多額のコストを要するという問題もあった。

「将来のトータルSCMとの連携を行う上で不可欠なリアルタイム処理も、旧システムのままでは実現が困難。そこで財務会計システムの再構築が必要でした」と岩本氏は語る。

EP8000とSANRISE、 SAP R/3による大規模財務会計システム

旧システムは各事業部(所)毎にメインフレームによるシステムが存在し、一般ユーザーからの入出金処理や財務担当者による財務会計処理が行われ、その結果を日立グループのネットワークである「HITNET」を通じ本社へ伝送し、全社集計するなど、バッチ処理を中心とした構成がとられていた。新システム「hi-Fronts」にはエンタープライズサーバ「EP8000」とSAP社のERPパッケージ「SAP R/3」を採用。データの保存・管理には、基幹システムで

実績の高い日立ディスクレイサブシステム「SANRISEシリーズ」を導入した。日立製作所情報システム事業部 経営システム部 技師橋本 正文氏は、その理由を「新財務会計システムは、他の新しいシステムと自在に、かつリアルタイムに連携できなくてはなりません。そのためには財務会計システム自身も、リアルタイム処理に対応していることが不可欠です。EP8000とSANRISE、SAP R/3の組み合わせはこうした要件を満たしていますし、Web環境での利用も可能であることを評価しました」と説明する。

またEP8000とSANRISE、SAP R/3を採用したもう一つの理由として、従来は各事業部(所)毎に行われてきた財務会計処理を集中処理できる点が挙げられる。現在SAP R/3は、データベースサーバ1台、負荷分散を考慮し、アプリケーションサーバ2台で構成されEP8000 680上で稼働。この結果、これまで約30カ所で行われていた63事業部(所)と各社の財務会計処理を、この「EP8000」3台で処理しているのだ。

24時間連続稼働によりリアルタイムの会計処理が可能に

hi-Frontsを構築したメリットについて、岩本氏は「B/S、P/L等のレポートをリアルタイムに検索できるため、決算処理が容易になりました。また、データのダウンロードも容易で

すので、ユーザー側で自由に分析・活用が行えます。データの検索・閲覧なども画面上で実行できますから、ペーパーレス化にも貢献しています」と力強く語る。

「従来のシステムをEP8000とSANRISE、SAP R/3に統合したことで、データ伝送、全社集計等のバッチ処理作業も削減。また各社・各事業部(所)が個別にシステムを構築・メンテナンスする必要もなくなりました。このことによるT.C.O.削減効果も大きいですね。経営環境の変化に伴う組織改革などにも、今後は柔軟に対応できます」と橋本氏も満足げに語る。

非常に大規模なシステムだけに、通常なら構築に長い期間を要すると思われるところだ。しかし今回の再構築では、開発着手からわずか一年で全社63事業部(所)への展開を完了。

「業務をパッケージに合わせる方向でBPRを行った結果、非常にスムーズに再構築作業を進めることができました。大企業を中心に実績の豊富なR/3を採用したことで、開発工数も1/3程度に抑えられました」と岩本氏は語る。

「購買や原価計算のデータを随時、柔軟につなぎ込めるよう、オンライン時間の制限をなくして欲しい」とのユーザーの声に応えるべく、財務会計システムでは異例とも言える24時間・365日稼働も実現。また、後々のバージョンアップ時に工数が掛からないよう、

アドオンの開発を最小限に留めるなどの工夫も盛り込まれている。

hi-Frontsを利用するユーザーの数は、財務部門、一般事業部門を含め約6,000名にも上る。しかし高度な処理能力を誇るEP8000を採用したため、パフォーマンス上も問題は生じていない。

「グループ全体の企業活動を支える重要なシステムですから、EP8000の高信頼性・高可用性も大いに役立っています。稼働開始以来、システムダウンはありません」と橋本氏は強調する。運用面でも、警告メッセージや障害発生メッセージを即時に検知し、システム管理者にメール送信できる自動監視ツールを導入し、システムの安定性を図っている。

ビジネス環境の変化に合わせてシステムをさらに発展させる

無事にカットオーバーを迎えたhi-Frontsだが、今後は海外拠点にも順次適用を拡大。経営管理指標、あるいは関連会社との連結決算なども、hi-Frontsの活用によりさらなる日程短縮を目指す予定だ。

「原価計算や資材購買、生産管理などとの連携によるトータルSCMを実現する上でも、hi-Frontsは重要な役割を果たすこととなります。戦略的な企業経営を推進する上では経営指標のリアルタイム化も重要な要素ですが、これもhi-Frontsで早期に実現していきたい」と岩本氏は抱負を語る。

今後さらに業務システムが拡大することも予想されるが、高度なスケーラビリティを備えたEP8000なら余裕をもって対応することが可能だ。24時間・365日連続稼働と大規模処理という過酷なhi-Frontsのシステム要件に応えたEP8000。今後も日立グループのリアルタイム経営を支える重要なインフラとして活用されることになる。

・SAP、SAP R/3は、ドイツSAP AGおよびその他の国における登録商標又は商標です。
・会社名、製品名は、各社の商標もしくは登録商標です。

お問い合わせ

株式会社 日立製作所
エンタープライズサーバ事業部

〒140-8572 東京都品川区南大井6-27-18 日立大森第二別館
TEL.03-5471-8902 FAX.03-5471-8994

<http://www.hitachi.co.jp/EP8000>

